日本山岳會富山支部會報
昭和２３年　　棟方志功

Ｎｏ．１２２

２０２４年　１０月１５日

公益社団法人 日本山岳会富山支部

巻頭言「山の日に想う」

先日九州の讃井会員と立山へ入り室堂平の散策をしてきた．幸い好天に恵まれ高山植物の可憐な花々を眺めながら歩く。多くの観光客や大きなリュックを背負った登山者、また小さなリュックを背負った児童たちの一行，多分立山登山をするのだろう。また雷鳥沢のテント場には色とりどりのテントが立ち並び若者たちが朝餉を楽しんでいた。下界は 30℃をこす暑さだがここは 15℃ぐらい、まさに天上の別世界だ。

私は 20 年あまりナチュラリスト（富山県自然解説員）とて主に弥陀ヶ原と室堂平の自然解説を、また毎年春山スキーに立山へ入っていたので、立山には特段の思い入れがある。夜は雷鳥沢ヒュッテで一泊、温泉につかって立山連峰の暮れなずむアーベントロートを眺めながら至福のひと時を過ごした。

登山は汗を絞って一段一段と苦労して坂道を登って頂上に到着、その達成感を味わうのが醍醐味だ。『山に親しむ機会を得て山の恵みに感謝する』山の日はやはり山で味わいたい。

最近の世相は楽して儲ける、目先の利益追求だけに走り詐欺事件や企業不祥事件が相次いでいるが、純な瞳の子供たちの登山姿を見ていると山の日が有意義な日となるように切に思うこの頃です。

（近藤　晋　記）

雷鳥沢より、立山紅葉

目　　次

巻頭言「山の日に想う」	近藤　晋	1
令和６年度支部総会・懇親会	河合義則	2
全国支部懇談会（神奈川）三浦アルプス縦走に参加して	石原ゆかり	2
第 39 回 播隆祭	宮崎勇人	3
第 14 回 山岳講演会	宮崎勇人	4
伊吹山　播隆さんに会う旅	金尾誠一	5
山小屋アレコレ	近藤　晋	7
登山道開削あれこれ	佐伯郁夫	10
追悼　大作一男さん	金尾誠一	11
会員動向・今後の予定	河合義則	12
編集後記	宮崎勇人	12

令和６年度支部総会・懇親会

４月 16 日(水)に令和６年度富山支部総会を開催した。コロナ禍を経て日常生活に戻りつつあると思われたがその間も確実に時は進んでしまったという印象である。支部総会は 20 名の出席と 22 名の委任状での開催になった。

会場は総会の後に移動しなくてもいいように懇親会場を使わせてもらった。

先ず、鍛冶支部長から昨年の古道調査の状況説明があり、令和６年度は取りまとめの段階となるということだった。個人的に心配だったのはこれからシーズンが始まるが今年の元日に北陸地方を襲った能登半島地震の被害について、山岳地帯の状況が全く分からなかったので、これから情報が入ってくるとどうなるのかという不安もあった。富山県でも震度５強や５弱といえば、明治維新の 10 年前に発生した「安政の飛越大地震」以来ではないかと思われる。鳶山の崩壊に伴う常願寺川の大氾濫という近代最大の自然災害である。今回は海岸部での液状化現象による家屋倒壊や沈下等の被害が多発し大きな被害が出たが、立山関連では称名滝下流から弘法までの「八郎坂」と呼ばれる登山道が崩落により通行止めとなったことが大きな話題となった。

この後、総会資料の説明と令和６年度の事業計画の承認をいただき、総会は終了した。引き続き同会場で 17 名の参加を得て懇親会を開催した。参加者からはコロナの長いトンネルをようやく抜けたのか抜けていないのかよくわからない状況への戸惑いの様子がうかがえた。会員の久しぶりの元気な会話は裏方にとっては充実した時間として感じられた。

（河合義則　記）

「全国支部懇談会（神奈川）三浦アルプス縦走」に参加して

月　日：2024 年 5 月 26 日（日）

参加者：松本、渋谷、広瀬、菅田、北田、瀬川、石原

2024 年５月 25（土）～26 日（日）に神奈川県平塚市で開催された全国支部懇談会、初日は第１回となる岡野金次郎碑前祭が湘南平の高麗山公園で執り行われ、二日目は今回の記念登山「三浦アルプス縦走」コースに参加いたしました。

旅行や研修で訪れたことのある神奈川ですが山登りに訪れたことはなく、どのような山々と出会えるのか興味津々。今回のコースは６班、富山からも７名の参加となりスタッフも含め総勢約 50 名ということで、現地への一斉移動の混雑を考慮し時差でホテルを出発、電車・バスを乗り継いでの約１時間の移動。

岡野金次郎碑前祭

普段、車を足として登山の際も登山口まで車で移動をしている身にしては、いつもより小さめのザックを背負い電車やバスでの移動、まるで子供の頃に戻ったような遠足気分にわくわくしながら登山口へと向かいました。

バスから降りて歩いた先の登山口のある場所は、富山の呉羽山丘陵の麓あたりの雰囲気を感じさせるような場所に多くの家々が立ち並ぶ中、道路沿いに少し小高い場所へ上がるような登り口が設けられており、午前９時過ぎ「三浦アルプス」縦走開始です。登り始めて

30 分ほどで第 1 の目的地「仙元山（標高 118m）」へ到着、頂上からは江の島が眺められ改めて神奈川を実感。

その後「戸根山（標高 189m）」・「観音塚」分岐を経て「大桜」、先発隊で出発した班に途中追いついたりしたりでビューポイントは、今回の参加者で大賑わいでした。我が班はもう暫く歩いた鉄塔の高台で昼食、朝からの電車・バスの乗り継ぎ移動もあってお腹も空いており、神奈川支部で準備いただいたおにぎり弁当をほおばり、景色を眺めながら他県の方々との会話も楽しみ完食。

乳頭山にて

昼食後は今回の最高峰の「乳頭山」目指して出発し、ほどなく到着。今回の「三浦アルプス」、縦走路へ入るとほぼ樹林帯の中の歩きで標高は一番高いところ「乳頭山」の 202m。普段標高差のある山々を登っていることを考えると物足りなさを感じるのではと思いきや、アップダウンを繰り返しながら登ったり下ったり、途中には葉面に草履の緒のような模様を付けた「ミズヒキ」や大きな「タブノキ」・「トキワツユクサ」等を発見。富山の里山で雪解け後から多くの花々が咲くのを楽しんでいる歩きとは違い、思いのほか花々との出会いがないのは少し寂しくもありましたが、その土地での自然状況による植物生態の違いも納得です。

出発から約５時間半、途中で遠くに丹沢の景色も眺められ満足の里山歩きでした。
因みに、累積標高__登り 605m・下り 614m、距離__8.7ｋｍとなりました。最後は「田浦緑地」への下山。参加者の方々のペースが速かったこともあり、「田浦緑地」で少し時間が有り緑地展望台へ登り景色を堪能。千葉の房総半島が見え東京湾の広さをあらためて実感、そしてすぐ手前の横須賀湾には海上自衛隊横須賀基地の艦船、眺める機会のない情景に感激を覚えながら，帰路への乗車となる JR 田浦駅へ、住宅街を通り抜け 14 時半頃到着。JR 田浦駅で富山からの参加者も解散となり、ここで二日間の支部懇談会の終了となりました。
おかげさまでお天気にも恵まれ、山それぞれにいろんな楽しみと出会いがある一日を過ごすことができ、また次回開催も楽しみにしています。

（石原ゆかり　記）

第 39 回　播隆祭

第 39 回播隆祭は令和６年６月２日に富山県(旧)大山町河内村の播隆上人顕彰碑前で開催されました。日本山岳会・生家の会から計約 20 名が参加しました。

生憎、三重苦に見舞われました。

① 通常の熊野川線が土砂崩れのおそれがあり通行止め
　⇒小口川からの林道経由、遠回りを強いられ約１時間遅れで始まりました。
② 鍛冶支部長が新型コロナ感染で欠席　⇒代わりに松本さんが挨拶
③ 開始時は曇り、途中からどしゃ降り　⇒播隆祭後の高頭山登山は中止

来賓の挨拶では、坂井広志さま（日本山岳会 山岳祭ＰＬ）から、
「播隆祭は初めて、これで全国各地の山岳祭はすべて出席した。越後支部では７月に高頭祭を実施しているので富山支部からも参加お願いしたい」
樽矢導章さま(日本山岳会　石川支部長)

「日本山岳会石川支部は久弥祭。久弥が初めて登った富士写ケ岳に記念登山している」
引き続き大作さんから最近の播隆関係の古文書解読について、
「天皇家と徳川家に縁があったのが明確になった」

播隆上人顕彰碑の前で

どしゃ降りの中、早々に撤収。皆さま林道経由、無事に帰れたのは何よりです。

（宮崎勇人　記）

第 14 回 山岳講演会
「山で遭難しないために　- 過去の山岳遭難事例から - 」

7 月 19 日(金)に富山市民交流館ＣｉＣ３階学習室において山岳講演会を開催した。講師は柳澤義光氏（(元)富山県警察山岳警備隊長、(現)富山県警察本部山岳安全課次席）、「山で遭難しないために　- 過去の山岳遭難事例から - 」。支部会員の他、山岳関係者 32 名が参加した。

柳澤義光氏 講演

最初に、全国および富山県の山の遭難発生状況、危険の３要因（地形的要因、気象的要因、人的要因）について説明。

続いて、山の遭難事故事例を説明され

① 一の越からタンポ平へ下山中、誤って御山谷へ下降
② 白馬岳から唐松岳へ不帰キレットを縦走中、誤って黒部峡側へ下降
③ 縄ケ池で道迷い
④ 大日岳から下山中に大日平の川スジに迷い込む

救助する側の視点で、救助要請に対し遭難者の発見に困難が伴うことをヘリコプターからのビデオ映像で見せていただいた。

聴講者は安全登山について意識を新たにした。　（宮崎勇人　記）

伊吹山　播隆さんに会う旅

月　日　令和６年９月 28 日(土)・29 日(日)
参加者　山田、宮崎、瀬川、金尾

「ネットワーク播隆」の黒野さんから、ばんりゅう通信５０号が送られてきた中に、「伊吹山　播隆さんに会う旅」の記載があった。その案内文には、「以前ネットワーク播隆では、播隆関連史跡や名号碑を案内した。しかし、これだけはどうしてもやらねばならない旅が残っていた。伊吹山、播隆上人の原点伊吹山中に行場を訪ね、廃村の笹又に残された阿弥陀仏を拝します。」とあった。世話人の纐纈さんからは、探訪地に至る道の難易度が記されていた。「①不動滝（難、片道１５分）崖上の細い道、足元のおぼつかない人は危険。②風穴（難、片道２５分）急斜面、健脚者のみ可。③播隆屋敷（易、片道３５分）林道歩き、④笹又阿弥陀仏（超易）車横付け」である。私にとっても、伊吹山の行場は念願の場所であったが、最近は山行きもめったにやっておらず、体力の低下も自覚していた。ただ、案内の纐纈さんは山ガイドのベテランであり、以前にも笠谷の石仏探訪でもお世話になったことがあり、何とかなるだろうと思った。なにより、行場への憧れが参加申込を促せた。

播隆が開山した正道院(岐阜市)

播隆上人像

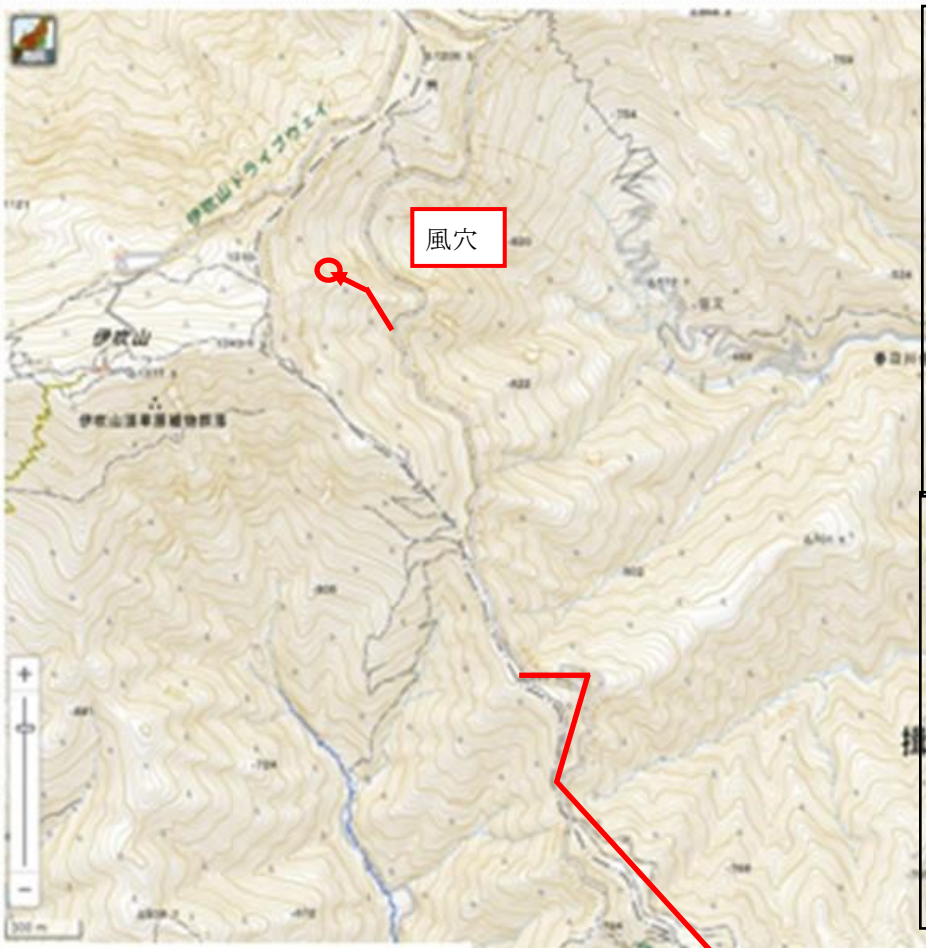
富山支部の有志四名は、各務原の「黒野美術教室」に前泊、岐阜市の正道院で、美濃加茂を出発したマイクロバスに乗り込む。当日の参加者は１６名。関ケ原を経由し、伊吹山ドライブウェイを進み、途中から徒歩で不動滝に向かう。道なき急斜面はきつく足が前に進まない人もあり、纐纈さんがザイルで確保する。また富山県の山では見かけないヤマビルに悩まされる。ようやく到着した滝は、いかにも行場にふさわしい雰囲気であった。時間があれば、服を脱いで滝に打たれてみたい所である。傍らの岩に祠が祀られていた。不動明王が安置されており、麓の玉地区の人たちが今もお守りくださっているそうである。

帰り道でアクシデントが起きた。滝からの小さな水の流れを下っていた時、バランスを崩し前のめりに倒れてしまう。幸い、とっさに手をついてカバーしたので、大事には至らなかった。しかし、右手を強打し掌がはれ上がった。纐纈さんにしばらくザイル確保していただき、車道へ降り立った。

一行は、霧があたりを覆う頂上駐車場で昼食をとった後、風穴へ向かった。私は、用心のためリタイヤしたので、以下宮崎さんにその様子を記載していただきます。

----- 「風穴」（宮崎　記）-----

風穴は伊吹山の中腹、標高約 1150m 地点。富山支部の山田､宮崎２名､他３名がアタック。伊吹山ドライブウェイ標高約 1000m 地点より急登、高低差約 150m、登り約 30 分、下り約 20 分。幸い事前に纐纈さんがザイルを張って下さり助かりました。道のない急な斜面を登りきると細い尾根になり、さらに登ると目印の石柱が立っていた。播隆が修行したと言われる風穴は、入口は人一人が入れるくらいの狭さだが奥行きは 10m ほどある洞窟で、奥は数人が



風穴

不動滝

播隆屋敷跡にて読経　竹中住職

播隆屋敷跡にて

横になれる広さがあった。播隆の精神力・信念と、播隆を信頼・援助した（今は廃村となった）笹又村の人々の温かい思いを感じた。------

播隆屋敷跡へは、参加者全員が歩いて到着する。正道院竹中住職が読経され、揖斐川の一心寺によって建てられた石碑の前で記念撮影した。播隆上人がここで修行されていた頃は、三間八間の草庵で、多くの群衆が集まり山のようであったと『開山暁播隆大和上行状略記』に記されている。ここまで予定の時間を大幅に超過しており、笹又の阿弥陀石仏は、後日、各自で参拝することとなった。

今回、念願の伊吹山行場を訪れることができ感慨深い。ただ、思わぬ成り行きでご心配・ご迷惑をおかけしお世話になったことに心からお礼申し上げます。この行事を企画され、また宿泊場所を提供していただいた黒野さん、困難な行場への案内をしていただいた纐纈さんに感謝申し上げます。

近年、伊吹山でも地球温暖化の影響からニホンジカが増殖し、その食害によって植物相の激変や大雨時の土砂流出が起きています。登山道も通行禁止となり、大掛かりな保全工事もなされています。播隆さんや円空さんはじめ多くの行者を育てた歴史ある伊吹山の自然が次世代に伝えられていくことを願っています。

（金尾誠一　記）

山小屋アレコレ

【　はじめに　】

銀行の現役時代 1975 年から 2 年間立山支店長をしていて、芦峅は立山支店の管轄で山小屋との取引が多く夏場には売上金の集金や両替金の持参に行員に山小屋へ行かせていた。また 1996 年から 20 年間ナチュラリストとして主に立山界隈の自然解説に従事していたこともあり春山スキーでも小屋をよく利用していた。立山には日本最古の山小屋もあり思いつくまま利用した小屋の思い出を記してみたい。

1944 年旧制中学校 1 年生のとき学校から立山登山をした。当時越中男子は立山へ登って一人前になると言われ、みな立山登山をしていた。その名残が今の小学校の立山登山となっている。

その時初日は称名小屋、二日目は地獄谷の雄山荘、帰路の三日目は弘法小屋だったと思う。雄山荘では小屋から長い階段を降りて地獄谷の温泉に入ったように思う。地獄谷にはもう一軒房治荘があり 1960 年頃春山スキーでよく利用した。帰路の弘法小屋は二階に塔屋があって冬は二階から入るようになっていた。称名小屋や追分小屋、弘法小屋、雄山荘、房治荘は有毒ガスの危険やアルペンルートの開通でその使命を終えて撤去されてしまった。

【　弥陀ヶ原界隈では　】

ブナ坂の登り口に 5~6 坪の小さな無人小屋が二つあり 1956 年、友人と二人でクリスマスを立山で過ごそうとスキーを持ってケーブル道を登り無人小屋で一泊したことがあった。今は愛鳥荘一棟だけ残っている。　また弥陀ヶ原の弥陀ヶ原ホテルは以前の木造つくりだった頃、春山スキーで無人の小屋に泊まったことがあった。今の「弥陀ヶ原ホテル」は泊まったことはない。「立山荘」はナチュラリストの指定宿で十数回泊まった。ここは食事がよく好評だった。

【　天狗平では　】

「立山高原ホテル」は友人が割引券を持っていたので春山スキーの帰りに一泊したことがあった。大浴場の窓が大きな一枚ガラスで窓外からの富山平野の雲海が見事だった。「天狗平山荘」は 1991 年 9 月日本山岳会の全国集会が立山でありその時台風 19 号が夜中に立山を直撃、山荘の風速計が瞬間風速 60m を記録，ドーン、ｽﾞｽﾞｽﾞ、ドーンｽﾞｽﾞｽﾞと今にも吹き

飛びそう、窓の外の草原にチカッ、チカッと火花が光っていた。風に吹き飛ばされた石と石がぶつかり火花を発しているのだ。小屋の主人が危ないのでみな一階に集まってくれと言うのでみな一階に集まり台風の通り過ぎるのを待っていた。翌日は台風一過晴れたのでみな立山登山に出かけたが小屋は強風で傾きその後補修して風除けの石垣を積み重ね現在に至っている。ちなみに天狗平山荘が建築されたのは 1964 年である。

【　室堂平では　】

ここには日本で最高地（2410m）の温泉「みくりが池温泉」がある。９月のある時温泉に入っていたら日本山岳会福井支部長の宮本さんにばったり出会った。彼はちょいちょい立山へ遊びに来ているようだった。ここは室堂センターから近いので入浴客でいつも結構混んでいる。「立山室堂山荘」は学童登山などでもよく利用した。ここは山小屋というよりも旅館といった感じで食事も実に素晴らしい。「雷鳥荘」は小屋の前にテーバーリフトがあるので山スキーの折数回泊まった。スキーヤーには格好の小屋である。

地獄谷の横には「雷鳥沢ヒュッテ」と「ロッジ立山連峰」がある。ロッジ立山連峰にはひと時佐伯文蔵さんがいて私が行くと雷鳥沢のあそこにアマナが出ているよ！と教えてくれた。これは山菜オオバユキザサの新芽でアスパラガスに似たとても美味しい山菜で今ほど自然保護がやかましく言わない頃のことで、今は特別保護地区でもあり一木一草採取できないのは勿論である。「雷鳥沢ヒュッテ」は一番よく利用した。主人万寿男さんにずいぶん懇意にして頂き 203 号室は私の指定部屋となっていた。ここの外湯はアーベントロートの立山を眺めながらの誠に結構な温泉だった。

日本最古の山小屋（室堂山荘横）
江戸中期の建築といわれ
国指定の重要文化財となっている。

室堂ターミナルにある日本最高所のリゾートホテル「ホテル立山」は数年前までアルペンルート閉鎖最終時、山岳警備隊、山小屋関係、県の出先機関、ナチュラリストなどを感謝の集いとして一泊 10,000 円の割安会費で宿泊、懇親宴会が行われ参加したことがある。ここは外国人か高齢の富裕層ばかりで登山者の姿は見当たらない。

【　稜線の小屋　】

「一の越山荘」はあまり泊まったことがないが 2021 年私の卒寿記念にスキー仲間と立山登山をしたとき９月中秋の名月を眺めながら抹茶を持参し月見の茶会と洒落たひと時を過ごした。「内蔵助山荘」は先代の利雄さんにずいぶん懇意にして頂き帰る時ご夫婦で手を振って見送っていただいたことが記憶に残っている。今の主人の常行さんが今でも黒部の谷から時々熊が登ってくると言っていた。

「剣御前小屋」には 1960 年秋友人と二人で立山を縦走してこの小屋に泊まった。もう小屋は営業終了し無人だった。夜中に風もないのにガタガタと音がしたのでびっくりして飛び起きたらネズミが走っていた。数年前春小屋開きに行ったとき押し入れから遭難死した人が転がり落ちたとニュースで聞いていたのでビックリビックリだった。「大日小屋」は夕食後ランプを灯した食堂へみな集まりギターをかき鳴らし山の歌などを歌って楽しいひと時を過ごしていた。まさに歌声の響くランプの山小屋だ。ここからの剱岳の眺めは素晴らしい。

【　剱岳方面　】

「早月小屋」JAC 元会長の藤平氏が胃がんを患い死線から回復し山仲間と早月尾根から剱岳へ登ったことがあった。その時はまだ伝蔵小屋の名前だった。食堂の大きな地図の前で藤平氏や同泊の岳人たちが東大谷の岩場のロッククライミングについて色々経験談など談義をしている横で伝蔵の親父がニコニコ笑っていたのが印象的だった。1998 年登った時はもう看板は架け替えられ早月小屋となっていた。

「剱澤小屋」「剣山荘」は剱岳登山の折必ず宿泊する小屋である。剣山荘は 2015 年 9 月私の米寿、山田会員の古稀、正橋会員の還暦の記念登山として剱岳を目指した時に泊まった。この時生憎前線が通過，物凄い風と雨で登山を諦め撤退したのが最後である。「仙人池ヒュッテ」は黒部峡谷下の廊下へ行くときの小屋で、ここからの仙人池に映る裏剱はまさに秀逸、いつまでも見飽きない。

いかにも山小屋らしい雰囲気の上高地、
徳本峠の小屋

風雪に耐えた高天原山荘
ここから 10 分ほど下った黒部川
源流わきに小さな露天風呂がある

【　季節小屋　】

真砂沢ロッジと阿曾原小屋がある。「真砂沢ロッジ」は剱岳のロッククライミングの連中ばかり、私は梯子段乗越から内蔵助平を経て黒部ダムへ行くとき利用した。乗越からの剱岳は平蔵谷、長次郎谷の雪渓の上に左右に別山尾根、八ッ峰を従えまさに北アルプスの盟主の風格がある。

「阿曾原小屋」は池の平ヒュッテから長い長い仙人谷を降りほっとして露天風呂に入ると疲れが吹っ飛ぶ。山の露天風呂としては白馬鑓温泉も山を眺め疲れを癒すのに似た感じである。また温泉といえば風雪に耐えた「高天原山荘」近くの黒部川沿い露天風呂は正に秘湯中の秘湯である。

【　県内の無人小屋　】

「白鳥小屋」「白木峰山荘」「大笠山避難小屋」季節無人「中根山荘」がある。中根山荘は持主山冨さんに了解をうけ人形山の春山スキーに数回自炊泊をしたことがある。ここは下界の光漏れもなく夜空の星がピンポン玉のように大きく光っていたのが思い出される。

【　その他　】

山小屋と云えばどこでも食事時など混雑するものだが､海外ではキナバル山登山の折のラバンラタの小屋は入山規制で混雑することなく誠に静かで落ち着いた雰囲気の小屋だった。

また台湾の玉山登山の折、唯一の山小屋「排雲山荘」で泊まったとき珍しく無人で、ガイドが食事を作っている間、庭の椅子の上で昼寝をしていた。小屋の玄関に漆で塗り固め

られた立派な扁額がかかっていて
『山楽者仁』と書かれていた。今から
2500 年前中国の思想家孔子の論語擁也
第六に『知者楽水、仁者楽山、知者動、
仁者静、知者楽、仁者壽』からきている。
この頃はまだ登山という文化は無かった
と思うが実に含蓄のある言葉である。
習近平氏にもう一度論語を読み返して
もらいたいと思うこの頃である。
（近藤　晋　記）

登山道開削あれこれ

１．黒菱山の登山道

ある日、山と渓谷社の編集者が私の店チロルを訪れた。日本全国の「分県登山ガイド」を発行するので相談にのってほしいとのこと。多くの人に執筆を依頼すると各自登山の経験や考え方に個人差があって統一のとれたものになりにくい。そこで私一人に任せてやってもらえば色んな面で好都合ということで私が取材執筆することになった。考えてみるとこれは大仕事である。天気のいい日は毎日山へ足を運び、カメラを２台持って山中を歩きまわっていた。時々山で顔を合わせる男から、ある日突然連絡があった。朝日町道下に住む折谷洋一と名乗り、笹川集落の許しをえて黒菱山に登山道をつけているという。尾根の上に出た所まですでに完成しており、その先頂上までの平坦部分をチロル山の会で刈ってもらって頂上で一緒に万歳をしましょうという。また笹川源流部の登山口に石の標識を立てるため募金を募りたいと考えているという。金額は五万円とのことだったので、それなら私のポケットマネーで出そうということになった。

笹川の人は黒菱山が世間に広く知られるようになることを大変喜んで、笹川自治振興会の竹内康博会長から登山口の石碑の除幕式開催の招待状が届いた。平成 21 年 6 月 14 日にチロル山の会数人と私と妻が参加した。多くの村民が参加し除幕式終了後に記念登山が行われた。

それから何日過ぎたかわからないが、ある日手紙が届き魚津総合庁舎へ出頭して下さいという文面だった。用件については大体予想がついていた。出頭すると机をはさんで話し始めたのは「貴方達が登山道をつけた場所は県有林であり勝手に道をつけるのは違反行為であり始末書を書いてください。」　私は悪いことをした覚えはなく、地元の人達から盛大な除幕式をしてもらったんだと話した。相手は惨めな顔で私の立場にもなってみて下さいと言われるので、始末書を書き石碑は川に投げ込んでもいいと言って帰った。

山は元はといえば入会林であり笹川村の共有財産だった。薪炭林として笹川の住民のかまどを温めていたのである。当の石碑はその後林道を運び下ろされ現在村はずれの三叉路の道路脇に設置されている。石碑の文字を揮毫したのは笹川集落の重鎮である竹内俊一氏で、新制魚津高校山岳部でリーダーだった人。氏は 1950 年３月魚津高校卒業、私はその４月に入学した。

２．元日本山岳会会員水口君との登山道開削

私の友人に昆布の加工販売を仕事にする水口武彬君がいた。親戚の家族が皆他界してその家を相続することになり不労所得を受け取ることになった。登山好きの彼は使い道を考えた結果、藪を刈り払って登山道を開けば喜ぶ人がいるだろうと考えて平成５年（1993）８月から白萩川のブナクラ谷に登山道を開削し始めた。それを聞いた私はなかなかいいことだと

感心して仲間に入れてもらい鎌やノコギリを持参して仲間に加わった。登山道といっても人一人が通れるだけのものである。時々平坦な所があると畳一枚くらいの広さの休憩場所を作った。一番厄介なのは根曲がり竹（ススダケ）であり、出たばかりのものは手で折ることができるが、毎年伸びて登山道をふさいでしまう。山に行く人はぜひ剪定鋏や小型の鋸を持参して伸びたのを除去してほしい。この時つけた登山道は今もうっすら残っていると長男の岩雄ガイドから聞いている。標高が高くなり森林限界を超えると灌木の成長が大そう遅くなるのでかなり明白に残っている所も多くあるという。

全国には駒ヶ岳と名が付く山が多くあるが、駒ヶ岳サミットが富山県で開催された時、僧ヶ岳から登山道のなかった駒ヶ岳まで多くのボランティアによって登山道が開通した。水口君も加わっていたが、新しい登山道が開通するともう次の登山道に移動してしまった。私は完成したところを見に行った。頂上の真新しい御影石製の碑には「標高 2002.5m」とすべきところ「漂高」と“ただよう”としてある。黒部市役所へ電話したところ早速訂正しますと言う。製作費やヘリコプターの費用も大金である。木製の標識にすれば一人で背負って設置できて安価である。今はウッドデッキなどに使用する腐らない木「ウリン」という輸入品もある。

水口君との最後の登山道草刈りは劔岳の大窓から早月川までのルートであった。戦時中池の平で掘り出したモリブデン鉱石を空中ケーブル（索道）で馬場島まで運び、そこから滑川へ下ろすことになっていた。私にとってはなつかしいコースであった。多くの登山道をつけた水口君本人から話を聞きたくて電話をかけたがなかなか連絡がとれなかった。そのうち「四年前に他界した」と聞かされた。

３．毛勝山の登山道

国立公園に登山道をつけた事例には、水口君のほかにもいろいろな人がいる。魚津岳友会に池原という男がいて、勤めていた県立大学を定年退職した時、暇をもてあまし登山道のなかった毛勝山に道をつけようと一人ではじめた。急斜面に足場を刻んで 1060m まで達していた時、私も加勢することにしてチェンソーを持参した。太い木は私が処理することにして効率を上げていった。上部に行くと彼はテント、食料などを荷上げして泊まり込みで作業をつづけて頂上に達した。その後池原は北海道に引っ越したが、登山道は毎年魚津岳友会が時々草刈りを続けている。　（次号に続く）

（佐伯郁夫　記）

追悼　大作一男さん

令和６年９月２４日、「播隆上人生家の会」世話役の大作一男さんがお亡くなりになられました（享年９４）。今年の播隆祭にも、例年通りお元気な姿を見せられ、お話もしていただいていただけに大変驚く知らせでした。

「生家の会」の人たちは、播隆祭を実行していく上で、強力なお仲間であり、とりわけ大作さんは、その中心となっていただいており、播隆祭にはなくてはならないお方でした。これまでの献身的なご尽力に深く感謝し、心から哀悼の意を表します。

第 39 回　播隆祭にて　2024.06.02
雨が降る中、播隆に関する古文書を
解読した資料を解説される大作さん

大作さんとは、私が電力会社に入社する二年前からご縁がありました。夏休みに小俣発電所へ実習に行った時、そこで大作さんが勤務されていました。関わった内容は、思い出せませんが、何故か大作さんのお名前はしっかり記憶しました。年月を経て、私が播隆祭を担当することになり再会しましたが、お互いすぐに打ち解けることができました。以来、会社の先輩である気安さから何でも相談させてもらい、播隆祭をともに盛り上げることに協力し合いました。また、播隆研究の上で大変大きかったネットワーク播隆代表の黒野さんとも大作さんを通じて懇意にしていただきました。

特に思い出深いのは、平成22年９月の上宝村訪問でした。上宝ふるさと歴史館で見学と上宝郷土研究会と懇談、杓子の岩屋参拝、高原山本覚寺で所蔵品拝見と住職さんの説明、お宿長七で上宝郷土研究会と懇親会、宿泊。盛り沢山の内容でしたが、富山支部５名と大作さんと息子さんが参加され、播隆研究の機運を盛り上げる貴重な行事となりました。

大作さんは常に播隆さんとともに生きてこられたような方でした。最近になって一心寺古文書の解読という立派な成果を上げられましたが、これは大作さんの熱意が諸先生方へ伝わって解読の労を取られた賜物でありました。大切な大作さんは亡くなられましたが、今後も「生家の会」とは連携し、播隆祭や播隆研究を進めていきたいと思います。

大作さんの法名は、「功徳院釈覺隆」でした。大作さんは檀那寺に力を尽くされ、その寺院の名から一字、播隆さんから一字採ってありました。播隆さん一筋に研究され、社会に貢献され、功徳を積まれた大作さんの生涯にふさわしいお名前でした。

（金尾誠一　記）

☆会員動向・今後の予定

○新入会員：目谷美津子(17328)

○物故会員：車　昭保（11157）9月6日逝去　81歳

○JAC橋本会長が代表を務めるフロントランナーズ・クライミング・クラブ（FRCC）の269回山行　8/22-24奥大日岳　女性42名　山行サポーターとして菅田・石原が参加
FRCCは女性がん体験者と医療・山行サポーターで構成

○県民登山教室（岳連主催）龍王岳　8/24　瀬川

○全日本登山大会新潟大会（JMSCA主催）湯沢温泉　9/21～23
松本、渋谷、瀬川、山田、菅田、石原、本郷、永山、中西

○五支部合同懇親山行（福井支部担当）一乗城山　11/16～17
富山支部から7名参加予定

○年次晩餐会

（河合義則　記）

編　集　後　記

９月29日、機会に恵まれ、伊吹山中腹の播隆上人の屋敷跡、修行されたであろう風穴・不動滝へ行くことができました。播隆の信念と、播隆を信頼・援助した（今は廃村となった）笹又村の人々の温かい思いを感じました。

先人の偉大な足跡に感謝するとともに、後進に引き継いでいく重要さを思いました。

（宮崎勇人　記）

公益社団法人日本山岳会　富山支部会報　第122号
発行：鍛冶哲郎　　編集：宮崎勇人
事務局：〒939-8095　富山市大泉中町 7-52-303　河合義則方　電話：090-4326-6197